「音楽を学ぶ楽しさに向かって」
―主体的・協働的な学びの中で、音楽表現を追求する学習活動を通して―

１　研究のねらい
２　研究の計画
３　研究の内容（実践１）
４　研究の内容（実践２）
５　研究のまとめ

研究の概要報告

実践報告では、ＩＣＴ機器をツールとして効果的に活用し、主体的・協働的な学び、音楽の視覚化、段階的な技能の習得などに焦点を当て、子どもたちが学ぶ喜びやわかる楽しさを味わい、深い学びに向かう姿がよく表れた授業実践が数多く報告された。

討論では、「子どもたちの主体的な音楽表現につながるＩＣＴ機器の効果的な活用」「音楽科教育と地域とのかかわり」の二つの視点を柱として意見交換がなされた。

「子どもたちの主体的な音楽表現につながるＩＣＴ機器の効果的な活用」では、リコーダーや鍵盤ハーモニカの運指、歌唱での音取りといった活用により、子どもたちが繰り返し練習できる利点があげられた。また、創作や音楽づくりにおいて、アプリを活用することにより、短い授業時間の中でも、子どもたちが意欲や達成感をもって学習をすすめられることもあげられた。実践報告でも表現を振り返ったり、比較鑑賞したりするなど、ＩＣＴ機器を活用している例が報告され、多くの学校がＩＣＴ機器をツールとして音楽の授業で活用している状況がわかった。しかし一方で、地域や学校によりＩＣＴ機器の性能や使用できるアプリに差があること、ＩＣＴ機器で創作した音楽を実際の表現にどうつなげるかが課題として出された。音楽科教育の中で、子どもたちが自分の歌声や楽器で表現することは大切なことである。そのためにも基礎的な技能の習得は欠かせない。主体的な学びの中にも、教員の適切な指導や助言があってこそ、技能の習得や定着がなされると考える。題材の中で、教員が指導する場面、仲間と協働する場面、個別に学びに向かう場面など、どのような学びを取り入れていくのか吟味する必要がある。

「音楽科教育と地域とのかかわり」では、地域の祭りと連携し、地域の方が講師となって太鼓の演奏の仕方を教えたり、子どもたちが祭りに参加したりする事例が紹介された。また、地域の音楽家や音楽愛好家の方を招いて演奏会を行ったり、子どもたちの合唱や演奏を地域の方に聴いてもらったりする活動を行っている学校も意見交流の中でみられた。一方、地域人材の確保やどのように音楽科の学習につなげるのかが課題としてあげられた。音楽を通して、身近な地域の方とつながることで、子どもたちが音楽への関心をもち、味わって聴くことや表現する喜びを感じることが高まると考える。そのためには、地域のコーディネーターとなり得る方の協力や同地域での学校間の連携が有効であり、音楽科だけでなく学校全体で学習活動と地域とのつながりを計画的に考えていく必要がある。

今後、本教育研究で論じられたこれらの成果をさらに深めていきたい。第 74 次へとつないでいきたい主な課題は以下の２点である。

○　子どもたちが協働的に音楽表現を追求できる効果的なてだて

○　主体的な学習活動の中での教員の指導・支援のあり方

（川合恒之・光川知里）

報告書のできるまで

第 73 次教育研究愛知県集会に、15 本のリポートが提出された。これらは、第 72 次までに積み上げられた課題にもとづいて、各分会から、各単組の研究集会を経て高められたものである。子どもたちが主体的・協働的な活動を通して、音楽のよさや楽しさ、奥深さを追求していくための工夫が多数報告された。また、ＩＣＴ機器を主体的・協働的な活動の中で効果的に取り入れ、学習効果を高めるためのさまざまな工夫も多数報告された。

この報告書は、名古屋市立南陽小学校・相坂晴美教諭が、「『音楽を学ぶ楽しさ』に向かって―主体的・協働的な学びの中で、音楽表現を追求する学習活動を通して―」の実践研究を、単組集会・県集会での報告や討論を参考にし、次の諸先生方の指導を得て、作成したものである。

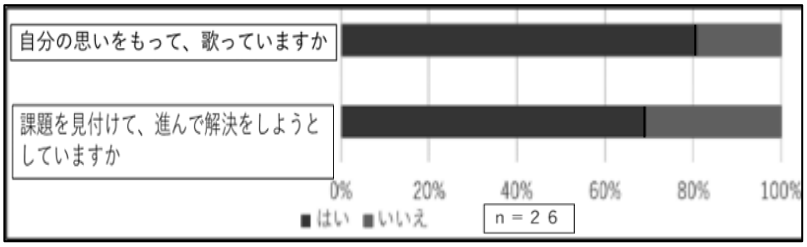
助　　言　　者	河合　恒之（名古屋音楽大学）	光川　知里（名古屋・高坂小）
教育課程研究委員	田中　省吾（名古屋・鎌倉台中）	難波友理子（名古屋・ほのか小）
	粥川　宏輝（犬山・城東小）	寺澤真智子（知教連・阿久比中）
	梶野　琴絵（刈谷・平成小）	近藤　章博（蒲郡・塩津中）
	中島　朋子（豊田・逢妻中）	澤下　了輔（愛知・(豊明) 栄小）
	花井　朋美（西尾・一色中）	

1　研究のねらい

わたくしは、曲想を聴き取ったり、「こんな風に表現したい」と思い試行錯誤しながら音楽表現を追求していったりするところに「音楽を学ぶ楽しさ」があると思う。そのために、曲想を感じ取り、そこからどう表現したいか思いをもつこと、思いを表現にいかすために自分の課題を見つけ、身につけた技能や知識を活用し、主体的・協働的に解決していく活動が必要であると考える。

本学級の児童は、いつも元気である。また、言われたことを素直に取り入れようとする素直さも、もち合わせている。しかし、この元気さは、音楽の授業では悪く出てしまい、どのような曲に対してもただ大きな声で叫びながら歌うにとどまっていた。楽しくなると、振り付けもつけてふざけて歌い始める。教員が注意をすると素直に止めるが、時間が経つと元に戻ってしまう。

これは、これまで教員主導で授業をすすめ、自分の課題や思いに気付く体験が少なかったのではないかと考えた。



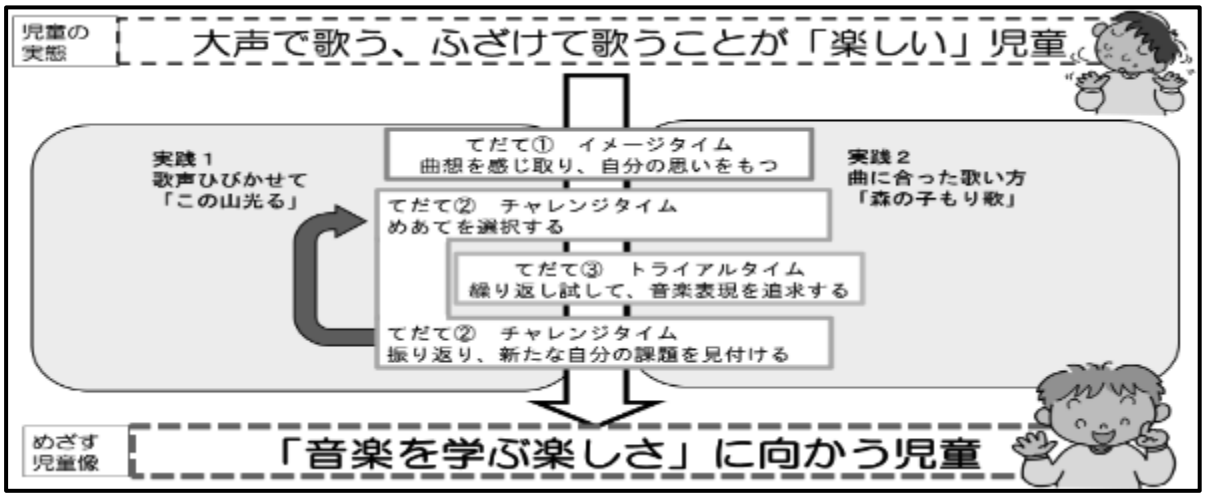
【歌唱に関するアンケート（実践前）】

まず、児童が歌唱に対してどのように考えているのかアンケートを行い、児童観察をした。「自分の思いをもって、歌っていますか」「課題を見つけて、進んで解決をしようとしていますか」の両方の問いに65％の児童が、「はい」と回答した。結果だけを見ると、自分の思いを実現するために課題をもってとりくみ、さらには、その課題を実現することができると考える児童が多いことがわかった。しかし、『小さな世界』を歌う際、「どのような感じがするか」という教員の問い掛けに「どんな感じがするだろう」「なんて言ってよいのかわからない」と、戸惑いながら答える状況であった。自分の思いをもつ前に、曲想をとらえ、言葉で表すところでつまずいていることが明らかになった。そこで、教員主導ですすめるのではなく児童が主体的・協働的な学びの中で音楽表現を追求する活動を通して、「音楽を学ぶ楽しさ」に気付くことができるようなてだてを取り入れ、実践をすすめていくことにした。

2　研究の計画

(1) 研究の対象　　南陽小学校３年１組　２６人

(2) 実践とてだて



【実践の計画】

３　研究の内容（実践１）

実践１　歌声ひびかせて「この山光る」

(1) ねらい

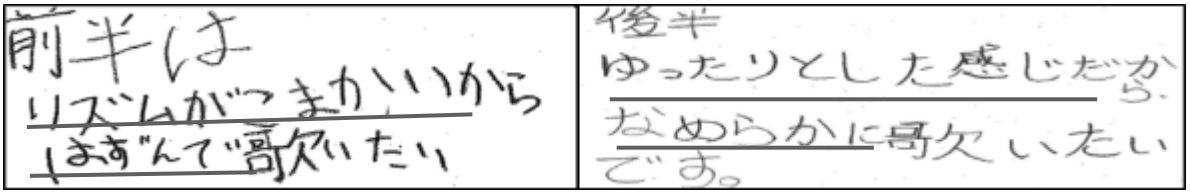
「この山光る」は、前半と後半の曲想が違う。この曲想の違いは、旋律だけでなく、リズムからも感じ取ることができる。また、「ホラヒ　ホラホ」などの部から山のこだまを想像することができ、歌詞からも思いをもちやすい。このような曲の特徴をいかして、音楽の構造や歌詞の内容から自分の思いや意図に合った表現を追求することができるようにする。

(2) 実践の経過

てだて①「イメージタイム」曲想を感じ取り、自分の思いをもつ

「この山光る」の前半と後半の曲想の違いをとらえやすくするため、リズム打ちを行った。前半は細かいリズムのため、音符の数が多いが、後半は緩やかなリズムのため、音符の数が減る。速度は変化しない曲だが「前半は速いけれど、後半は遅くなった」とつぶやく児童がいた。教員が「本当に速さが変わったのか、２拍子の拍をたたいて確認しよう」と提案し、確認させた。すると、「速さは一緒みたい…」と児童が困惑した。ある一人の児童が１小節にある音符の数が違うことに気付いた。その後、他の児童も「前半の方が、音符が多い」「後半は音符が少ない」と発言し、数を確認していた。

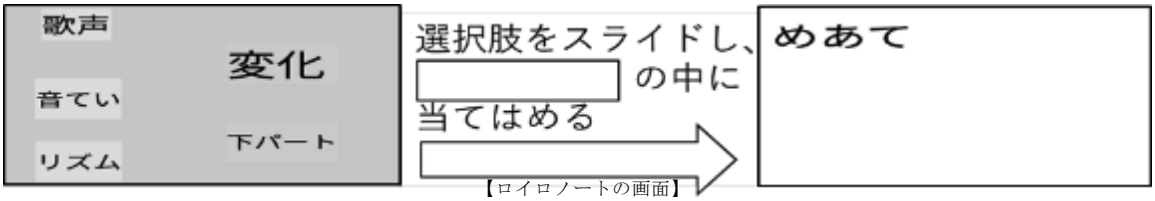
その後、もう一度リズム打ちをしながら曲を聴かせた。活動がすすむにつれ「前半は、弾んでいる」「後半は、滑らか」という発言がみられ始めた。さらに、「前半はリズムが細かいから、弾んで歌いたい」「後半はゆったりとした感じだから、滑らかに歌いたい」と、曲想を感じ取り、自分の思いをもつことができた。



【児童の記述】

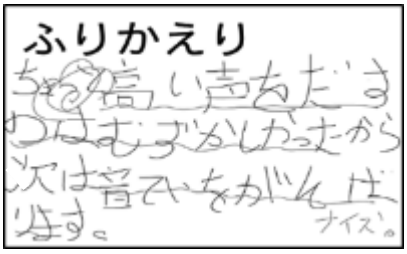
てだて②「チャレンジタイム」めあてを選択する・振り返り、新たな自分の課題を見つける

自分の思いを表現に生かすことができるよう、児童がめあてをもって、練習にとりくめるようにした。ロイロノートを使用し、めあてを５つの中から１つ選択させ、スライドをして、カードに入れさせた。



【ロイロノートの画面】

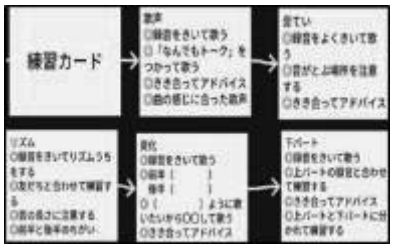
児童は、歌が上手になるには何が必要か熟考しながら、めあてを選んでいた。めあてを立てた後は、「トライアルタイム」に移った。（後述）「トライアルタイム」を振り返り、ロイロノートに提出させた。提出されたカードには教員が朱を入れ、児童の自己評価を認め、さらに自分に合った課題にむき



【児童の振り返り】

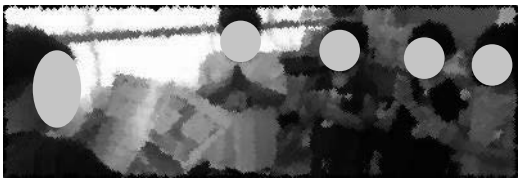
合うことができるようにした。めあてと振り返りを循環させることで、音楽表現をどんどん追求できるようにした。

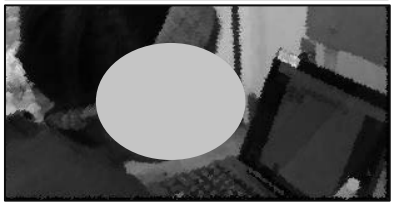
てだて③「トライアルタイム」繰り返し試して、音楽表現を追求する



【練習カード】

てだて②「チャレンジタイム」で立てた自分のめあてを達成することができるように、繰り返し試して練習にとりくませた。練習をすすめるときは、同じめあての友だちとグループを作り、歌い手と聞き手にわかれて一緒に練習してもよいと伝えた。児童だけで練習をすすめられるよう、教員が録音した伴奏と、練習カードを用意した。





【それぞれが練習をする様子】

リズムをめあてに立てたグループは、一人が聴く役、他がリズムを打つ役にわかれ、練習をしていた。「今、ここでリズムがずたよ」「ここから、もう一度合わせよう」と、話し合いながら練習していた。活動をする中で、音符の長さが正確ではないことが明確になり、課題解決にむけ、表現を追求する姿がみられた。

曲想の変化をめあてに立てたグループは、ロイロノートの動画を活用し練習をすすめていた。まず、歌う様子を録画し、その動画を見ながら話合いをしていた。「もっと弾んで歌おう」「声をつなげると、滑らかに歌えるかも」と確認し、思いを表現できるように試していた。

グループに加わらず、一人で練習をすすめる児童がいた。自分の表現を、ロイロノートで録音しては確認し、試行錯誤を繰り返していた。児童は「複数で練習するより、時間いっぱい考えられる」と考えたようだ。一人で音楽表現を追求することはどこかで限界がくるのではないかと心配したが、児童は、次時には音程をめあてに選び、同じめあてのグループと練習していた。児童は、自分の課題を一人で解決する時間と、グループで解決する時間を分けてとりくむことができていた。

(3) 成果と課題

てだて①「イメージタイム」

○　リズム打ちをしながら曲を聴くことで、曲想を感じ取り、音楽表現への思いをもつことができた。

●　児童がイメージタイムで導き出した「滑らかに」という音楽の言い方を、他の曲では、いかすことができなかった。

てだて②「チャレンジタイム」

○　自分の課題が何か、一人ひとりが真剣に考えることができた。また、振り返りの際、次時への課題を書かせ、教員が朱でコメントを入れることでめあてと振り返り

を循環させ、主体的に音楽表現をすることができた。

● めあてをすべて選択肢にしたことで自由度がなくなってしまった。また、音程が取れていないのに難しいめあてを選んだり、十分できているめあてを選び続けたりする様子から、児童は自分に合った課題が理解できていないのではないかと考えた。

てだて③「トライアルタイム」

○ 同じめあての友だちとのグループ、自分一人でなど、練習をすすめる形態を児童自身が選び、とりくむことができた。また、協働して活動を行ったり、動画を確認し自分のめあてと向き合ったりする中で課題が明確になり、課題解決にむけて熱心にとりくむ様子がみられた。

● 教員の思ったように学習が進んでいないと、「この『練習カード』を見ればよいのではないか」「リズムがそろっているか」などと、指示を出しすぎ、課題解決にむけてリードしてしまった。

(4) 実践２にむけて

てだて①「イメージタイム」では、曲から感受したイメージを音楽の言葉とつなげるために、「音楽の言葉ノート」にとりくませる。「音楽の言葉ノート」では、さまざまな曲を聴き、そこからイメージする雰囲気を表した全身で表現したものを録画し、音楽の言葉とつなげてロイロノートにどんどん記録していく。

てだて②「チャレンジタイム」では、めあての選択肢に白紙のカードを用意する。また、授業の終わりに自分の歌声を録音し、それを聴きながら振り返りをする。実践１同様、児童がロイロノートに提出した振り返りに教員が朱を入れることにする。

てだて③「トライアルタイム」では、引き続き、教員が録音したものと、練習カードを用意する。加えて、児童が練習中に迷うことがないよう、模範となる動画を新たに用意する。また、児童の様子をよく観察し、どの場面で助言・指導すると効果的で児童が主体的に学べるかを考え、児童を信じて見守るという気持ちをもつようにする。

４ 研究の内容（実践２）

実践２ 曲に合った歌い方「森の子もり歌」

(1) ねらい

「ピラロルラ」という児童の興味をひく歌詞から始まり、１番は親鳥、２番はひな鳥について歌う。これらの歌詞の情景を想像しながら歌うことができる。また、曲想や音型からどのように歌いたいか、自分の思いをもち歌うことができる。

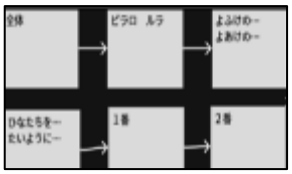
(2) 実践の経過

てだて① 「イメージタイム」曲想を感じ取り、自分の思いをもつ

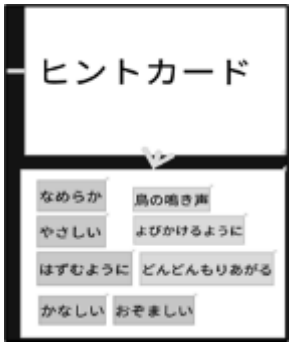
曲想をとらえるため、「音楽の言葉ノート」を作成した。新しい曲を学ぶ度、曲想を全身で表現し、録画させた。それを、教科書の巻末にある「音楽を表すいろいろな言葉」を参考にして言葉とつなげ、「音楽の言葉ノート」にまとめた。さらに、言葉とイメージがつながるよう、明るい感じは㊥、暗い感じは㊥、どちらにも当てはまる感じは㊥と、色分けをした。児童は、「音楽の言葉ノート」に言葉が増えることを喜んでいた。

【身体表現を録画する様子】

「森の子もり歌」の学習が始まった。曲を数回聴くと「滑らかな感じがする」と児童が話した。それに続き「優しい感じ」「ピラロルラって何」と、曲から感じたことを話し合っていた。身体表現をする前に、これまでの経験から曲想を素早く感じ取り、話し合う姿から成長が感じられた。



ロイロノートに、歌詞を書いた枠を用意し部分ごとにどう歌いたいか自分の思いを書き留めるカードを用意した。自分の思いを言葉とつなげることが困難な児童には、選択肢を用意した。



【歌詞の枠・ヒントカード】

学習が始まると、ある児童が「ピラロルラ」の歌詞が「鳥の鳴き声だ」と気がついた。教員が「何羽で鳴いているの」と問い掛けた。児童は「何羽で鳴いているんだろう…」と近くの友だちに相談をし始めた。児童が「ピラロ」と「ルラ」の間に四部休符があると気付き「２羽かも…」と考え始めた。他の児童がやって来て「２羽だったら、話しているように歌ってみよう」と助言していた。教員が投げ掛けた問いから、児童が集まり、自然と話し合って学びを深める姿がみられた。

てだて② 「チャレンジタイム」めあてを選択する・振り返り、新たな自分の課題を見つける

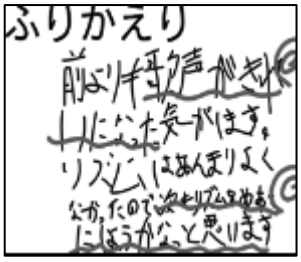
実践１同様、自分のめあての選択は、児童に任せた。今回は、白紙のカードを選択肢に入れた。また、振り返るときは、タブレット端末にある自分の声の録音を聴き、次時のめあてを考えさせた。

【一緒に練習する友達を探す様子】

児童は、よく考えてめあてを立てていた。練習をする時、一緒に練習する友だちを探しやすくするため、めあてをロイロノートの提出箱に提出させ、画面共有をした。児童は共有画面を見て「歌声を練習する人、一緒にやろう！」「リズムの人！」と声を掛け合い、練習を始めていた。

【録音した自分の声を聴く様子】

トライアルタイム後、タブレットに自分の歌声を録音して聴いた。リズムをめあてに選んでいた児童が「リズムはできたけれど、声が出ていない」と振り返っていた。また、音程が取れていない児童へは、「オルガンと自分の声が合っているかよく聞いてごらん」と問い掛けた。すると「ぴたっとは合っていない」と振り返ることができていた。録音や教員の問い掛けは、客観的に振り返る材料となった。



【児童の振り返り】

児童が提出した振り返りに朱を入れ、返却した。「歌声がよくなったから、次はリズムをめあてにしよう」と、課題を克服したことに加え、次時の課題も見つけられた。実践１より、自分の課題に合っためあてを立てられるようになったが、白紙のカードは、誰も使用しなかった。自分でめあてを考えてもよいと伝えたが、全員、選択肢を頼りにしているようであった。

てだて③「トライアルタイム」繰り返し試して、音楽表現を追求する

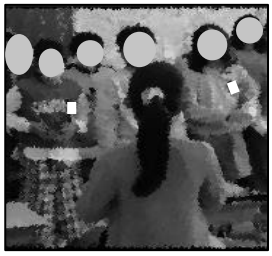
児童が練習時参考にできるよう、伴奏の録音、練習カードに加えて、模範となる動画を用意した。動画は、教員用のタブレット端末で見せた。

【動画を視聴し、教科書に書き込む様子】

練習が始まると、各々が練習形態を選び、練習にとりくんでいた。動画を視聴していた児童が立ち上がり、教科書を持ってきて、曲を聴いて学んだことを書き込み始めた。

歌い方をめあてに選んだ児童が、二人並んで体を動かしていた。楽譜の５段めから６段めにかかる曲の盛り上がり方のイメージを全身表現で表しながら歌い試していた。「『ねんね静かにおやすみと』が一番強くなるから、これぐらいの強さかな」「優しい感じも出したい」と、歌いながら音楽表現を追求していた。てだて①「イメージタイム」で行った全身の表現を、自分で考えて練習にも取り入れることができていた。実際に、曲の盛り上がりや優しい感じが上手に表現されていた。この二人の児童が「みんなに盛り上がるところを知らせたい」と、全員の前に立ち、「『ねんね静かにおやすみと』の段々盛り上がるところが合うように練習しよう」と呼びかけ、練習を進めていた。この頃になると「始めは４人で練習をしていたけれど、４人だと音がうまく聞き取れないから、二人ずつにわかれて練習をしている」と、自分たちでただ集まって練習をするのではなく、目的をもって児童どうしがグループを作り、よりよい方法を見つけようとしていた。今この時、一緒に練習をすることで成長できるからと声をかけ合い学ぼうとする姿から、主体的・協働的に学ぶ態度が身についてきたと考える。

【全身の表現を用いて、練習する様子】


【クラスに呼び掛け、練習する様子】

【二人で練習し、教科書で確認する様子】

(3)　**成果と課題**

てだて①「イメージタイム」

○　曲から感受したことを、全身の表現を用いて「音楽の言葉ノート」にまとめたことで、曲想と言葉が結びついてきた。また、曲を聴く度に自分の言葉で伝えられるようになってきた。

てだて②「チャレンジタイム」

○　自分の歌声を録音して聴いたり、振り返りに教員が朱を入れたりしたことで、客観的に自分の課題を見つめ、自分に合っためあてを立てられるようになってきた。

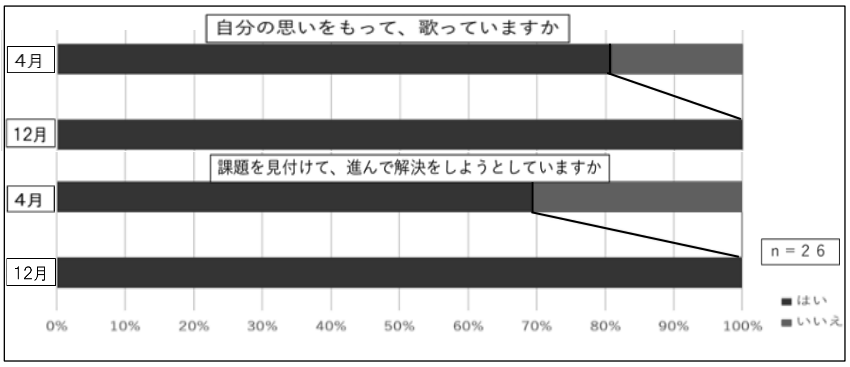
●　自分で柔軟にめあてを考えるのではなく、選択肢に頼る場面が見受けられた。

てだて③「トライアルタイム」

○　教員の録画や練習カードに加えて、模範となる動画を新たに用意したことにより、児童が自分たちの力で課題解決にとりくもうとする姿がみられた。また、教員が効果的な助言や指導を心掛けて授業をすすめたことにより、児童がそれをヒントに、主体的・協働的に音楽表現を追求する様子がみられた。

５　研究のまとめ

「自分の思いをもって、歌っていますか」「課題を見つけて、進んで解決をしようとしていますか」の問いに100％の児童が「はい」と答えた。また、「４月に比べて、思い通りに歌えるようになった」「課題を見つけて練習したら、それに気をつけて歌えた」という声が聞かれた。実践を通して、自分の思いをもち、音楽表現にいかすためには、どうすればよいか試行錯誤しながら活動する中で、主体的にとりくむことができるようになったと考える。



【歌唱に関するアンケート（実践後）】

今後も、主体的・協働的な学びの中で音楽表現を追求することで、「音楽を学ぶ楽しさ」気付くことができるような授業を考えていきたい。